

山宮神社

館山市東長田字前作一〇六一



●宮司…代田健一
●例祭日…九月十五日
●安房国司祭に準ずる

●本殿…銅板葺神明造
●鳥居…神明鳥居
●氏子数…百二十世帯

祭神 大山祇命 八重事代主命

由緒 朱鳥元年(六八六)、神主秋山家の遠い祖先にあたる中臣鎌足の子である中臣幸彦が摂津国三島より移住し、三島の鴨神社祭神の「大山祇命」をお迎えし、当社を創建したとされています。また養老二年(七一八)に安房国に班田使という役人がやってきたとき、神田として七町八反歩の土地が寄進され、三島の鴨神社にお祀りされている「八重事代主命」を大山祇命と一緒に祀りました。



本殿入口まわりの彫刻

時代が流れる中で源頼朝、里見義成からも厚い寄進を受け、江戸時代には徳川將軍家から十石の神社地の御朱印の証文をいただいています。明治になってからは幕府にもらった土地はお取り上げになってしまいました。その後は豊房村から幣束や祭事費用が供進される社格となりました。江戸時代までは山宮大明神、長田大明神とも呼ばれていましたが、明治元年からは山宮神社と改められ、現在に至ります。

自慢の祭 安房国司祭出祭

東西の長田地区あげての最大の祭礼が例年九月に鶴谷八幡宮で行われる安房国司祭への神輿出祭です。山宮神社古文書によると「延久二年(一〇七二)の秋、安房国の八幡の海岸へはじめて神輿を出す神事が行われた」とあり、およそ千年に渡ってこの神事が続けられていることになりました。「長田の神輿」とも呼ばれる山宮神社の神輿が、それぞれの時代でどんなふうになつて担がれていたのかは定かではありませんが、現在も強いこだわりを持って引き継がれている伝統は、鶴谷八幡宮拜殿までの全道の道程を担いで渡御することです。



待ち待った安房国司祭へ出発

八幡祭礼出祭にあたっては、東西の長田地区が順番に務める「年番」によって仕切られます。明治十二年の資料によれば、「輿丁や神具持ちは東西長田村が均等に出すものとし、輿丁は二十人、神具持ちは十人、合わせて四十人に限る」とあります。現在では東西長田地区からそれぞれ総代、世話人、青年、婦人会、子ども会等が総出で祭礼に参加します。

八幡祭礼初日の早朝に、黒の手甲、黒の足袋、「長田」の文字と朱の巴紋が染められた豆絞りの白丁姿の青年達が山宮神社に集まってきます。出祭神事が執り行われた後、朝七時出発。仕来りにより年番区内を通り抜け、途中立ち寄りながら鶴谷八幡宮までのおよそ12キロのすべの道程を担いで渡御します。

午後三時半、いよいよ八幡入祭の時がきます。八幡に入る時には「走る神輿」としての誇りを胸に、神輿の前を低くしながら一の鳥居から拜殿まで一気に走り抜けます。そして拜殿前では八幡出祭の喜びを力強い大きな採みさし

で御祝いします。その後神輿を御仮屋へ納め、御旅所にて疲れを癒やします。

翌日、八幡祭礼二日目の午後七時頃に還御の時がきます。多くの観衆を前に最後のハレの舞台に力が入ります。そして鶴谷八幡宮を後にして山宮神社までのおよそ9キロの道程を渡御と同じにすべての道を担いで帰ります。東長田観音院から山宮神社までは、油断すると足を外してしまうような二本棒の神輿が通れるぎりぎりの道幅で、暗闇の中で担いで通れるのは、歴史の中で経験に支えられた「長田の神輿」ならではの至難の業です。山宮神社へ帰ってくると、祭の終わりを惜しむかのように神社の回りを幾度も幾度も回ります。東西長田の自慢の祭が終わるのは、今でこそ日付が変わる頃ですが、少し昔までは薄っすらと東の空が明るんでくる頃だったそうです。



拜殿へと疾走する長田の神輿



鶴谷八幡宮境内で、この日を迎えられた喜びを力強く大きな採み刺して表す



子どもから大人まで総出で行われる「やわたんまち」

このパンフレットは、地域の方々からの聞き取りを中心に、さまざまな文献・史料からの情報を加えて編集しています。内容等につきましては、ご指摘やご意見等ございましたら、ぜひご連絡いただき、ご教示賜りたくお願いいたします。

写真提供(一部) 全日本写真連盟館山支部